

## 報告

# こどものためのあかりミュージアム 「あんどん皿と花鳥風月」

廣 瀬 由 子

HIROSE Yuzu

筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群  
人文学学位プログラム歴史・人類学サブプログラム 博士前期課程

## はじめに

2021年夏、日本のあかり博物館（長野県上高井郡小布施町）で、こどものためのあかりミュージアム「あんどん皿と花鳥風月」展が開催された。当展示は、例年夏季に開催される「こどものためのあかりミュージアム」の展示として企画したものである。筆者は当時、民俗学専攻の大学4年生で、当博物館学芸員 宮坂瑞紀氏の指導の下、博物館実習として本展示の企画と構成、展示資料の選定、ポスター（図1）、パネル（図2）、ワークシートのデザインを行った。会期は2021年7月9日（金）から11月23日（火・祝）までの約4か月半で、日本のあかり博物館2階展示室で開催された。本稿では当展示の展示内容について報告する。

## I 「あんどん皿」について

灯火から落ちる油からの汚れを防ぐため、行灯の台の上に置くことを目的とした皿は「油皿」や「行灯皿」と呼ばれている。本展示は子どもたちの鑑賞を企図したものであるため、呼称を「あんどん皿」と統一した。皿の面に絵模様が軽快な速筆で描かれたものが多く、暗闇のなかに行灯の灯影によって絵模様がほのかに浮かび上がるように見えたことだろう。

室町時代に起源を持つ行灯は、文字通り当初は携行用照明具として使われていたが、江戸時代に手燭や提灯が普及するにしたがって、据置き型のあかりとして普及した。倉橋（1932）は、「行灯が明治三十年頃から廃れてしまったから、



図1 ポスターおもて面

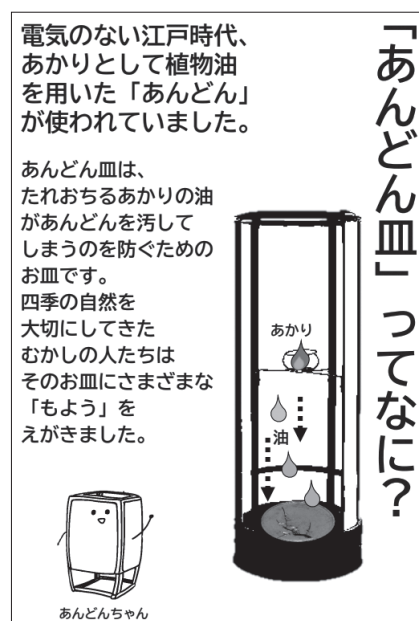


図2 パネル「あんどん皿ってなに？」

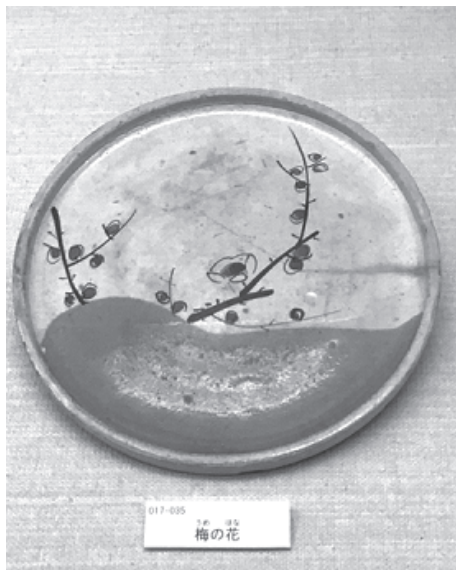


写真1 あんどん皿「梅の花」

大体今残つてゐるものは、維新前後から明治二、三十年頃のものとする事が出来る」（『油皿』まえがき）とその制作年代を推察している。「あんどん皿」の発祥年代の特定は困難であるものの、古くは真鍮製であったものが文化・文政期頃から陶製皿として量産され、広く用いられるようになったとされている（見波 2010：80）。陶製「あんどん皿」は主に瀬戸地方を中心に量産されていたが、文明開化期の石油ランプやガス灯等の登場によって、行灯とともに使われなくなっていく。

しかし、昭和初期に民藝運動をすすめた柳宗悦によって、陶製「あんどん皿」の美術的価値が高められていくこととなる。日本民藝館設立前の民藝運動は「あんどん

皿」に強い関心を寄せていたことが、1927（昭和2）年発行の『雑器の美』からうかがえる。毎日眼に触れ、実用に耐える「雑器」こそその「用の世界」の美が、「あんどん皿」に見いだされるようになり、また、日本民藝運動において中心的役割を果たした雑誌『工藝』創刊号において、柳は「あんどん皿」を「工藝」として評価している（柳 1931：84）。1937（昭和12）年発行の『工藝』72号では、河井寛次郎・浜田庄司・柳宗悦・比木喬による座談会の記録が以下のように掲載されている。「繰り返しの結果は草を想はずして草を描き、鳥を想はずして鳥を描く。遂には牛を思って馬を描く。蝶はいつしか雲となり、雲はいつしか線となり線はいつしか点に沈む。元を忘れた所に新しい命が萌え出でた。これが凡べての民画に共通の性格だった。行灯皿の絵は無意識の所産であり、無意識からのみ生み得た絵だつた」（河井・浜田・柳・比木 1937：19）。このように制作過程に着目し「雑器の美」を見いだした柳らによって、「あんどん皿」は鑑賞されるようになる。柳田国男は、1944（昭和19）年発行の『火の昔』のなかで、「あんどん皿」を「家々の欠くべからざる道具の一つ」であったと記している（柳田 1944：43）。明治生まれの両者による以上の記述は、「あんどん皿」が、未だ使われていた幼少期の経験をもとに記述される点に共通点がある。このような「あんどん皿」再考のムーブメントは、行灯、石油ランプ、そして電灯という急速な照明環境の変容を経験してきた世代という、当時の照明技術史的背景に留意する必要がある。

「あんどん皿」はその描かれた絵模様から、現在でも人びとを惹きつけている。「あんどん皿」に焦点を当てた近年の展示としては、豊田市民芸館第46回企画展『あんどん皿一文様百態一展』（1999年）をはじめとして、日本工芸館『古作・瀬戸の行灯油受け皿』展（2003年）、瀬戸蔵ミュージアム『瀬戸の絵皿を愉しむ～石皿・馬の目皿・行燈皿』（2013年）などがある。しかしながら、「あんどん皿」のみに焦点を当てた展示は未だ少なく、管見の限りでは、子ども向けの「あんどん皿」の展示としては、本展示が初めての試みとなると考えられる。「あんどん皿」に関する歴史的研究は未だ少ないものの、筆者は昔の人びとの日常生活を知ることのできる貴重な資料のひとつとして、現代において「あんどん皿」を見直す必要があると考える。

## Ⅱ 展示を考えるにあたって

本展示を考えるにあたっては、日本のあかり博物館で発行された『あんどん油皿百選：江戸の記憶』（2014年）を参考にした。本書を読み進めるにつれ、「あんどん皿」の持つ機能性とその美術性を兼ね備えた魅力に強い興味を持った。

日本のあかり博物館の常設展示では、日本のあかりの歴史を体系的、網羅的に学ぶことのできる展示がなされている。そこで、本展示を考えるにあたっては、灯火具本体ではなく、「あんどん皿」に焦点を当てることによって、常設展とは異なる視点からの、自然と暮らしの関係性を伝えられるよう検討を進めた。

館蔵品は、瀬戸地方で生産されたものがその多くを占め、直径15cmから24cmのものに至るまで、大きさも多様なものがある。それぞれの皿には、軽快な速筆で花や鳥、帰帆図などの植物や動物、風景が描かれたものなど、自然を画題とした作品が多い。そこでこの点に注目し、一枚一枚の皿に「描かれた自然」に、「花鳥風月」という言葉を結びつけて捉え直すことによって、人びとの生活を照らすあかりの近くで寄り添ってきた「あんどん皿」から自然の美を再考する機会になるようテーマを設定した。

## Ⅲ 展示構成

展示構成は画題によって花鳥風月の四字になぞらえた「花の章」（写真2）、「鳥の章」（写真3）、「風の章」、「月の章」そして「なぞの章」の五つの章から構成した。本章では、それぞれの章についての概要を紹介する。

### （1）花の章

はじめに「花の章」では、花を画題とする作品を19点展示した。作品の展示の配列を、梅を先頭に、桜、あやめ、朝顔と、花が咲く季節順にすることで、四季の学びに自然とつなげるように工夫した。ひとつの画題の花ごとに、複数の作品をひとかたまりとして展示することによって、花の描かれ方の違いや技法、取り合わせの違いを楽しむことができる。

「花の章」、続く「鳥の章」では、子どもたちに、「あんどん皿」をより身近に感じてもらうために、画題ごとに「花鳥カード」と名付けたパネルを作成し、展示ケース壁面に設置した。デザインをトレーディングカード風にしたそれぞれのパネルには、春夏秋冬の四季を記すとともに、3行から5行ほどの画題の説明を付している。花の章では、あんどん皿「梅の花」（写真1）に対し、「梅・いちばやく春を知らせる花・春」といった情報（図3）を付すことによって、「あんどん皿」の鑑賞にとどまらない季節や日本の伝統模様の学びにつながるパネルづくりに苦心した。

### （2）鳥の章

「鳥の章」では、鳥を画題とする作品を18点展示した。雀や鶏などの、暮らしに今も身近な鳥をはじめとして、吉祥のモチーフとしての鶴や鳳凰が描かれた皿を紹介した。





写真2 「花の章」展示風景



写真3 「鳥の章」展示風景

「花の章」と同様に、解説パネルとして「花鳥カード」を設置した。花の章では春夏秋冬を示していた情報に換えて、「鳥の章」では、「千鳥・波」（図4）などの取り合わせを付した。「あんどん皿」の特徴として速筆で軽快な作風が挙げられるが、かわいらしく描かれた鳥は来館者から好評であった。

### (3) 風の章

「風の章」では帰帆図を中心に、風景を画題とする作品を7点展示した。画題から「風」を感じることができるよう、「風がはこぶあんどん皿の旅」をテーマに作品を並べた。笠に合羽を身につけた人物が描かれた「旅姿」の皿をはじめに展示し、帆船を見送る「ひげ老人」に続く形で富士山と帆船が描かれた帰帆図を並べた。このように並べることで、「ひげ老人が見送った帆かけ舟は、富士山や村も通りすぎて次の目的地へとむかっていく」というような時間の経過を感じさせるような、物語性を展示に持たせることで、楽しく鑑賞に親しむことができるように考えた。

「風」の章では、あえて解説パネルを設置せず、作品のキャプションのみにとどめている。この章では同じ画題の作品のみを展示し、必要最低限の情報のみとした。親しみを込めて数多く制作された画題だからこそ、その、円い皿の枠にとどまらない描かれた世界の広がりや自然と感じられるものになるように考えた。

### (4) 月の章

「月」の章では、阿倍仲麻呂が描かれた「天の原」の皿や「うさぎの餅つき」など、「月」を画題とする6作品を紹介した。月にゆかりのある皿をあつめた章とすることで、行灯のあかりに頼っていた電気のない夜を主題として並べている。夜、行灯にあかりをともした昔の人びとにとって、月も暮らしを照らす特別な光であったことだろう。あんどん皿「うさぎの餅つき」には、あんどん皿の円型の「かたち」を月に見立てる当時の人びとの感性が感じられる。



図3 パネル「花鳥カード」より「梅」



図4 パネル「花鳥カード」より「千鳥」



写真4 あんどん皿「山水図」



図5 パネル「想像してみよう!」

## (5) なぞの章

最後の「なぞの章」では、「ひょうたんから駒」などのように、描かれた画題に込められた意味が一見すると分からないものや、短時間に速筆で描かれたからこそ、偶然に生まれたユーモアのある作品を、9作品展示した。盃に箕、ひょうたんなどの描写から、故事「養老孝子」を示唆する皿や、流水に菊が浮かぶ菊水と蝶が描かれた皿から、「菊慈童」の物語を想起させるものなど、ストーリーを伝える皿を紹介した。このように、「あんどん皿」から子どもたちの想像を刺激する解説パネルの表現を追求した。

あんどん皿「山水図」(写真4)は、山と水の漢字で、山水を表現し、また侍姿の人物が魚を釣ろうとしている様子が描かれた作品である。この画題のなかの人物がどこで魚釣りをしているのか想像を促すパネル「想像してみよう!」(図5)を設置した。

## (6) ワークシート

展示会場入り口には、ワークシート「あんどん皿のもようさがし!」、「あんどん皿に隠されたナゾ!」の2枚(図6)を設置した。空欄補充形式で、あんどん皿一枚一枚をじっくりと鑑賞することができるよう、描かれた風物を回答する「あんどん皿のもようさがし!」を作成した。また「あんどん皿に隠されたナゾ!」では、画題になった故事や和歌について、解説パネルや鑑賞を手掛かりとして考えることができるものになるよう、問題を設定した。学校教育では出会うことの少ない、昔の日用品としての「あんどん皿」との出会いがよりおもしろいものになるよう工夫した。



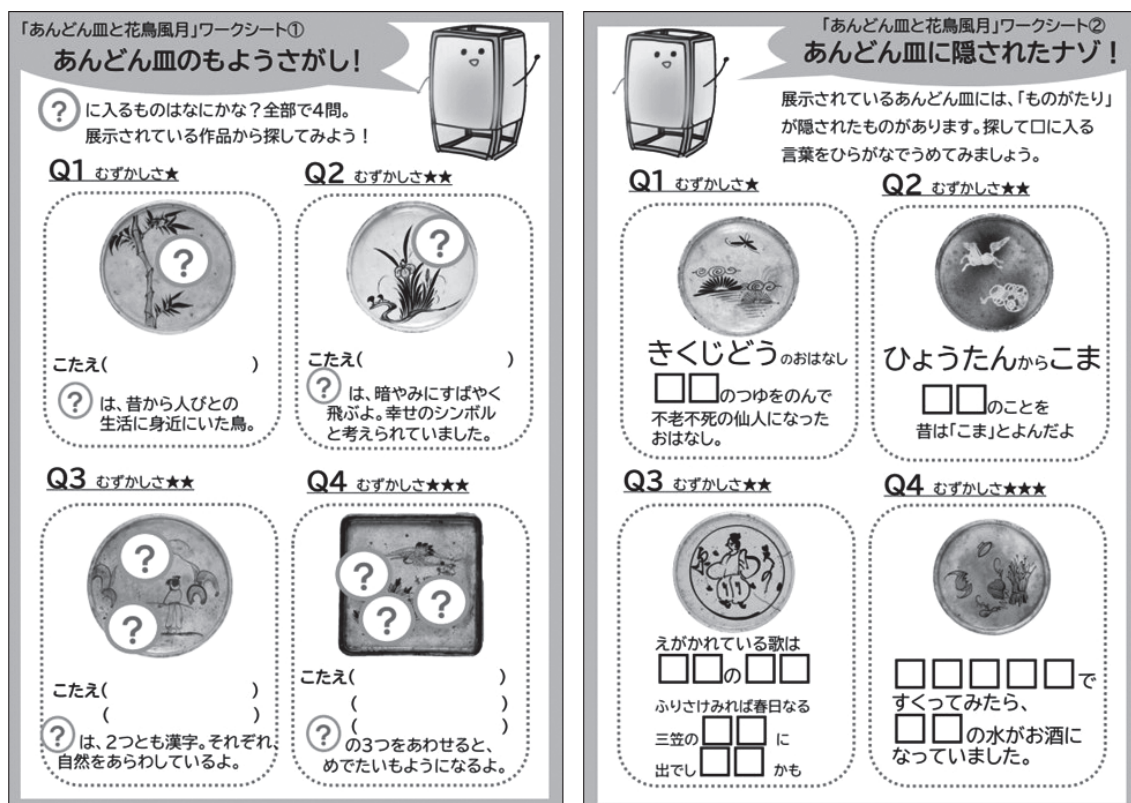


図6 ワークシート2枚 (A4版)

## おわりに

暮らしに欠かすことのできない行灯を油で汚さないよう置く皿を、単なる無地の皿のままにせず、四季の花や風景を描いた昔の人びとの感性を、子どもたちが「あんどん皿」の鑑賞を通して考えることができるよう企画した。新型コロナウイルス感染症が流行する現在を生きる子どもたちが、四季折々の自然のうつろいや、吉祥の願いを込めた当時の人びとの息づかいを「あんどん皿」の鑑賞を通じて感じることでできる展示となるよう努力した。

本展示は日本のあかり博物館の豊富なコレクションがなくては実現しなかった。展示品の全てが館蔵品であり、1982（昭和57）年の開館以来の長年にわたる研究活動をもとに、博物館実習生として展示に関らせていただける機会を得た。信濃毎日新聞で展示について報じられたおかげで、子どもたちだけでなく幅広い年代の方が展示を楽しんでいただいたようである。筆者は都内に在住していたため、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を鑑み、本展初日の前日まで一度も長野県にある博物館に伺うことができなかった。そのため、本展示の企画構成、展示資料の選定、ポスター・パネル等のデザインなどに関わる指導、情報交換は全てメールで行われた。実際に展示空間を把握していなかったために、本展の構成を考える際、会場レイアウトやパネルの大きさ等を考慮することは困難であったが、博物館から入手した資料写真をもとに、楽しみながら展示コンセプトや展示空間を考えていくことができた。展示準備期間中、展示品の陳列作業やパネル印刷などの準備に参加できなかったことは大変申し訳なく感じている。最後まで日本のあかり博物館の皆さまのお力に頼ることが多く、メールや電話で指導していただいた学芸員の宮坂氏と同館の職員の皆さまのご支援に、この場を借りて心から感謝する。

## 参考文献

- 河井寛次郎・浜田庄司・柳宗悦・比木喬 1937 「行灯皿」『工藝』(72)：1-24、東京：聚楽社。(日本民藝協会『民藝』1991 (467)：2-9 に再録)
- 倉橋藤治郎編 1932 『陶器図録：油皿』東京：工政会出版部。
- 須田敏夫 1996 「民藝通信・石皿と油皿」『民藝』(528)：28-31、東京：日本民藝協会。
- 瀬良陽介 1961 「石皿と油皿」『日本美術工芸』(276)：60-61、大阪：日本美術工芸社。
- 田中かな編 1960 『石皿と油皿』京都：平安堂書店。
- 日本のあかり博物館 『あんどん油皿百選：江戸の記憶』小布施町（長野県）：公益財団法人日本のあかり博物館。
- 日本民藝美術館編 1927 『雑器の美：民藝叢書第1篇』東京：工政会出版部。
- 三田村善衛 2008 『石皿で候』東京：里文出版。
- 見波瑞紀 2010 「あんどん皿」『信濃』62 (1)：79-87、松本：信濃史学会。
- 本山桂川 1944 『日本民俗図誌』5、東京：東京堂。
- 料治熊太 1965 「画集『石皿と油皿』の画題について」『民藝』152：18-19、東京：日本民藝協会。
- 柳宗悦 1931 「美の標準」『工藝』(1)：48-50、東京：聚楽社。
- 柳田国男 1944 『火の昔』東京：実業之日本社。